

2024年1月の総評に代えて

○林 桂○

●まちりこ●(埼玉県 48歳)

いつ雨に降られてもいいような空

大きめの金魚鉢をさがす

【評】一行目と一行空白を挟む三行目の距離感に、何かしみじみとさせるものがある。どこか感傷的な雰囲気である。日常とは、こういうことだと教えられる思いでもある。

●さいう●(愛知県 19歳)

すいれんの閉じる

に併せ

ねむる祖母の

まぶたに溜まる月光のあお

【評】朝開く睡蓮の花。ここでは閉じている夜に焦点を合わせ、眠る祖母に重ねる。「まぶたに溜まる月光のあお」の抒情性が美しい。睡蓮も青い月光を浴びながら、朝の目覚めを待っている。

●小島 涼我●(東京都 21 歳)

校正で誤字を見つけた春の日の
桜ざわざわ咲く吉野山

【評】一行目と一行目の関係性をどうよむか。「ざわざわ」に胸騒ぎを重ねて読んでもよさそうだが、むしろイメージの飛躍こそこの作品の魅力だろう。無意識に近いさまで、風に騒ぐ吉野山の桜が突然出現してしまったのだろう。

●高橋ちひろ●(宮城県 29 歳)

長靴の汚れをホースで流すときの
冷たくはない水の感触

【評】長靴が泥で汚れるような作業の後で、長靴を履いたまま汚れをホースの水で洗い流す。二行目の感覚はまさしく、その感じを伝えている。靴ごしに水の流れを感じながら、その水温は感じられない。これも日常に眠っている感覚だ。

●Flim●(神奈川県 23 歳)

バスの窓は

きゆるきゅると鳴く
仔イルカの記憶を
手放せないでいるの

【評】水族館で仔イルカを見ての帰りのバスの車中。「バスの窓は」を主語に立てることで、追想を蘇らせる装置のような働きをさせている。

●玻璃●(愛媛県 23歳)

「月面着陸！」
書齋にカンカン帽飾る

【評】日本が世界五番目の国として月面着陸を成功させた。そんな時事を発想の切っ掛けにした作品だろう。しかし、「書齋にカンカン帽飾る」との取り合わせは意表を突いている。単にそのニュースに触れたときの身の回りの描写なのかもしれないが、「！」を付けながらも、作者の思いは必ずしもニュースに向き合っていないようにも見える。見ているのは、自身のありようではないか。

●うたた●(岡山県 18歳)

鉛筆が折れずに終われますように

キットカットを割らずに食べる

【評】キットカットは、その名から受験のお守り代わりになっている。そうであれば、「鉛筆が折れずに終われますように」という願いも切実。神経を研ぎ澄まさざるを得ない受験期。ご健闘を祈ります。

●詩央えみる●(大阪府 23歳)

青空を撮る人がいて青空が
美しくなることの悲しみ

【評】画像を美しく「映える」ように撮り、場合によっては加工する。空も美しく撮る工夫をして画像に定着させる。美しい空の画像になることを、作者は「悲しみ」という。繊細な心ばえに惹かれる。

●佐藤 ことみ●(秋田県 24歳)

蒲団の角をカバーの中で見失う

【評】蒲団カバーの中で、蒲団の角がずれてしまったのか、蒲団カバーを掛けようとするときに蒲団の角がなかなか見つからないのか。単純なことながら、私も苦手な作業なので共感する。それよりも、これが「口語詩句」になると

いう発想の方にこそ感心する。

●水嶋 理●(埼玉県 22歳)

家を出るお金がどうしても足りず
代わりにカラーマスカラを買う

【評】ここでの「家を出る」は、実家を出て独立した生活をする事だろう。もちろん、アパートを借りるにしてもまとまった資金が必要である。資金的に無理と悟って、代わりに「カラーマスカラ」を買う。心の中で、家人と少しでも距離をとろうとの努力である。

●加那屋こあ●(東京都 52歳)

冬芽に触れて
もう
戻らない
覚悟

【評】「もうもどらない覚悟」が、何に対してのものか書かれてはいない。しかし、冬芽との出会いの些事が、その力となっている。私たちの覚悟の切っ掛けも、このような瞬間に訪れることが多いだろう。些事であることは、覚悟の強さと関係ないことであろう。

●狛犬 吠●(岡山県 21歳)

目の中に無数の花火の残像を
飼ったまま金魚を覗きこむ

【評】花火を見て帰った眼裡には、まだその光が残っているようなのだ。「飼ったまま」の比喩表現が、金魚をのぞき込む行為との繋がりを演出している。花火、金魚という華やかな映像の中に、作者の若さも感じさせる。

●浪花 小槇●(東京都 18歳)

爪切りを
無くしたままで生きている

【評】日用品で無くしたままになっているものを改めて思い出させる。爪切りのような毎日使わないものは、たしかになくしやすい。爪を切る都度、身近な人に借りれば、ことは済みそうでもある。また、他に気が付かない何か大切ななくし物もありそうに思えてくるのだ。